

相澤隆氏から厳しい御批判と御指摘を賜った。本書では両氏の御批判を可能なかぎり取り入れつつもりである。両氏に深甚の謝意を表する次第である。

本書を上梓するにあたり、創元社編集部の堂本誠二氏に格段の御高配を頂いた。ここに心から御礼を申し上げる。

二〇一三年一月

高橋 理

参考文献

ハンザ史ほど外国の盛況に比べて日本での研究が乏しい分野はめずらしい。邦文文献のみでは不足なので、欧文の主なハンザ史概説も紹介しておきたい。

邦文文献でハンザ通史に近いものとしては

高村象平『ドイツ・ハンザの研究』（日本評論新社、一九五九年）

がある。高村氏は日本におけるハンザ史学開拓者で、本書の価値は今なお高い。しかし、水準としては同氏の高村象平『ドイツ中世都市』（一条書店、一九五九年）

のほうが高い。そのなかのリューベク市民の土地所有に関する論文は本邦としては最初の本格的ハンザ史研究である。この高村氏の二著はその後まとめられ、左記改訂版として出版された。

高村象平『西洋中世都市の研究』（筑摩書房、一九八〇年）

邦人の成果として

関谷清『ドイツ・ハンザ史序説』（比叡書房、一九七三年）

がある。事実上、本邦最初のハンザ史総観であり、ハンザ通史として一切の項目を含んでいるのはこれだけである。ただ膨大に過ぎ、叙述にもう一工夫欲しいところである。

最近になると何点かのハンザに関する邦人の文献に恵まれるようになった。

斯波照雄『中世ハンザ都市の研究』（勁草書房、一九九七年）

同『ハンザ都市とは何か』（中央大学出版部、二〇一〇年）

がその代表で、著者はいくつもの都市にわたってさまざまな局面、たとえばハンザ都市内部の市民闘争を研究してきており、右二著はその集成である。

谷澤毅『北欧商業史の研究』（知泉書館、二〇一一年）

は近世における世界経済の形成を念頭に置きつつ展開された、中世末を主とする雄大なハンザ史展望を示している。さらに翻訳ではあるが、

デヴィッド・カービー他著／玉木俊明他訳の『ヨーロッパの北の海——北海・バルト海の歴史』（刀水書房、二〇一一年）

もハンザ史研究にとって有用な成果である。

個別論文としては戦前に

増田四郎『独逸ハンザ都市リューベックの成立について』（東京商科大学研究年報『経済学研究』第四号）

がある。今日ならばいくつかの論文に分けられるべきものだが、戦前の論文としてはきわめて水準が高い。ハンザに
関しては高村象平氏の個別論文もとり多いが、ここではそれらを集大成した前記二著を挙げれば十分であろう。

比嘉清松「中世末北ヨーロッパにおける毛皮取引」（『松山商科大学論集』一九卷二号、一九六八年）

は生活必需品取引を主とする北方貿易のなかで意外に重要な地位を占めていた毛皮取引が中世末に盛行した事情を探
究している。

また、ハンザ都市における市民闘争について次の研究成果に接することができる。

服部良久「中世末期リューベックにおける市民闘争」（『史林』五九卷三号、一九七六年）

はリューベックの市民闘争を扱い、経済情勢や市民層の変化とにらみ合わせつつ、リューベック市民闘争の本質解明を試
みている。

影山久人「中世末葉ニュルンベルク・リューベック間交易事情の一斑」（京都外国語大学、『コスミカ』7、一九七七
年）

は、本書で割愛した南ドイツ商人のハンザ圏進出という問題を扱っている。ニュルンベルク商人がハンザ商人に転身
する過程をドイツ南北の社会経済的対比を背景に論じている。

高橋理「一三世紀ヴィスビ・ドイツ商人による北方通商法の確立」（『史学雑誌』八八編一一、一九七九年）

は、ハンザ商業の起源を法史的視角から扱い、ハンザ商人の先祖がどのような労苦を払ったかを論じ、それを通じて
ハンザの本質解明をねらっている。

さらに若手研究者の業績として、

小野寺利行「中世ノヴゴロドのハンザ商館における生活規範」（『比較都市史研究』三〇巻二号、二〇一一年）

が挙げられる。小野寺氏は年来ノヴゴロド商館規約（スクラ）の閲読と分析に専念しており、前掲論文はその成果で
あるが、知られるところの乏しい具体的事実をわかりやすく整理・解説した功績は大きい。同氏はスクラと本格的に
取り組んだおそらく日本で最初かつ唯一の研究者であり、今後の学会への貢献が期待される。

もう一人の若手研究者の成果として、

柏倉知秀「十四世紀後半リューベック商人のネットワーク」（『立正史学』一〇五号、二〇〇九年）

が得られた。柏倉氏はこれまでのハンザ史研究にはあまり取り入れられてこなかったプロソポグラフィクな手法を導
入し、それを用いて一三六八年のポンド税台帳を分析し、リューベック有力商人の実態を明らかにした。同氏はさらに
一四世紀後半のポンド税決算書の分析を通じてハンザ諸都市の商業規模と勢力序列を明示した

柏倉知秀「中世ハンザ都市の商業規模」（『比較都市史研究』二三巻一号、二〇〇四年）

を世に問うている。

なお、ハンザ都市に関する邦文文献でも、ハンザ史研究という方向性の乏しいものは割愛した。

邦語文献が乏しい反面、欧文文献は無数にあるとらえてよい。論文としては、一八七一年以来ハンザ史学会により
毎年発行されている *Hansische Geschichtslitteratur* 掲載論文がきわめて重要であるが、ここでは通史のみ紹介する。

現在最も定評があるのはフランスの文献、

Philippe Dollinger, *La Hanse (XIIe-XVIIe siècles)* (Paris, Aubier, 1964)

である。著者はアルザスの人で昔はドイツ中世農業史研究で知られていた。その後ハンザ史研究にも乗り出し、現在ではハンザ史研究の重鎮となっている。学術的にも信頼度が高く、通史としても手頃であるが、理論を好み日本の研究者には多少物足りなさかもしれない。原文はフランス語だが、ドイツ語訳 (Philippe Dollinger, *Die Hanse*, Stuttgart, Krüner, 1976、ハンザ史学会による訳) と英訳 (Philippe Dollinger, *The German Hansa*, London, Macmillan, 1970) がある。本場のドイツでは大戦直後の良きハンザ通史がなす。一般に最も広く読まれているのは

Karl Pagel, *Die Hanse*. (Braunschweig, 1952)

で、たびたび版を重ねている。しかし、専門家の間での評判は芳しくない。著者が素人であるうえに、学界の研究水準と無関係で学術的価値がないからである。しかし、写真が多いのは有益である。

戦前の著作では

Dieterich Schäfer, *Die deutsche Hanse*. (Bielefeld & Leipzig, 1925)

は、今日でも一応の利用価値がある。著者は一九世紀末から二〇世紀にかけて長らくハンザ史学を牛耳った大ボスで、歴史学は政治に奉仕すべきだと公言して憚らなかつた人物として知られ、帝政時代のドイツ政治家とも縁が深かつた。それだけに国粹主義的な傾向には注意して読む必要がある。

Theodor Lindner, *Die deutsche Hanse*. (1898, 3. A., Leipzig, 1902)

も同種の傾向を帯びた書物であるが、その点を割引けば一九世紀の学問的気風を伝えた意外な良書である。今日専門家は重んじないようだが、具体的史実を知るうえでなかなか参考になる。

シェーファーに次いでハンザ史学の権威として一時代を築いたのは本書でも言及したフリッツ・レーリヒである。

彼の著書・論文は多数にのぼるが、主な論文を集めた

Fritz Rörig, *Wirtschaftskräfte im Mittelalter* (Köln, Böhlau, 1971)

を挙げるにとどめよう。彼に対しては批判もあるが、商人ハンザ史を開拓した業績は高く、論述が力強く理論性にも

富んでいるので読みごたえがある。さすがにレーリヒの論著には邦訳されているものが二点ある。

F・レーリヒ著／瀬原義生訳『中世の世界経済』(未來社、社会科学ゼミナール四六、一九六九年)

フリッツ・レーリヒ著／魚住昌良・小倉欣一共訳『中世ヨーロッパ都市と市民文化』(創文社、歴史学叢書、一九七八年)

ともにレーリヒの学風を知るうえで手頃である。

Walther Vogel, *Kurze Geschichte der deutschen Hanse* (Phngsblätter des Hansischen Geschichtsvereins 11, 1915)

は概説として最良だとする評をえもある。事実、著者はドイツ航海史の最高権威として現在でも名声が高く、未完に終わったその主著

Walther Vogel, *Geschichte der deutschen Seeschifffahrt I*. (Berlin, 1915)

は、ハンザ貿易の実態を知る上で今日なお必読書の地位を保っている。

戦後の文献としては

Ahasver von Brandt, *Geist und Politik in der Lubeckschen Geschichte*. (Max Schmidt-Römheld, Lübeck, 1954)

が有益である。レーリヒの遺業を継ぎ、戦後のハンザ史学では第一人者であった。本書はリュートイクの歴史をさまざまな角度から論じたもので、叙述は二〇世紀にまで及んでいる。定評のある概説を読んだ後に読むとよいであろう。通常のハンザ史概説からは得られない貴重な示唆を与えてくれる名著である。

Hanse in Europa. (Kunsthalde, Köln, 1973)

も重要である。共同執筆による項目別ハンザ史というべきもので、執筆陣も一流である。ハンザ史の特定問題をコンパクトでしかも高い水準で知るのに好便である。

統一前の東ドイツでは

Johannes Schildhauer, Konrad Fritze, Walter Stark, *Die Hanse* (VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften, Berlin, 1975)

が出版された。共同執筆の三人はいずれも旧東ドイツのハンザ史学を代表する人々で、それぞれ高度の専門研究を發

表している。本書がハンザ史概説として妥当か否かはともかく、東独ハンザ史学の基本精神を知る上での必読書である。ヨーロッパでは *Dreimännerbuch* という愛称で親しまれている。

概説そのものではなすが、

Dierich Schäfer, *Die Hansestädte und König Waldemar von Dänemark* (Jena, 1879)

は対デンマーク戦争時代のハンザを扱っている。本書は近代ハンザ史学の開幕を告げた記念碑的著作で、ハンザ史学会第一回の受賞作品となった。しかし、ハンザ史学にドイツ国民主義を吹き込む元凶となったのも本書である。その後の受賞作品として

Ernst Daenell, *Die Blütezeit der deutschen Hanse 2 Bde.* (Berlin, 1905)

も重要である。シュトラールズント条約からユトレヒト条約までを扱ったが、したがって「ドイツ・ハンザの最盛期」という表題となっている。叙述が多面的なので有益であるが、皮肉なことにその題名にもかかわらず、ハンザ衰退期の事情を知るのに好個の文献でもある。

ドイツ語以外の文献としては古く、

Helen Zimmern, *The Hansa Towns.* (London, 1889)

がある。出版当時は貴重な成果だったと思われるが、今日では学術的価値は乏しい。英語でハンザ史を読もうというのであれば、最初に挙げた Dollinger の英訳を読めばよい。

最近の欧文文献としては次の諸冊が重要である。

Klaus Friedland, *Die Hanse.* 1991 (Kohhammer Urbanaschenbücher Band 409)

著者は数年前高齢で他界された現ドイツにおける最高のハンザ史家であり、大部のハンザ通史は書き残さなかった。本書は氏の唯一とも言うべき概説書であり、何よりも文庫本の形態を取り、簡便に読めるのが有り難い。むしろ氏の著作でハンザ通史に近しいのは、

Klaus Friedland, *Mensch und Seefahrt zur Hansezeit.* 1995. (*Quellen und Darstellungen zur hansischen Geschichte. Neue*

Folge Band XLII Böhau Verlag)

であろう。何しろ著者は「ハンザに関する史料のすべてを閲読した唯一の人」と噂されるほどの大家。この二書のみならず論文が多数あり、ハンザを深く研究しようと志す人には同氏の論著は必読である。

ドイツではついに前世紀末に前記 Dollinger に匹敵するハンザ史概説が出た。

Heinz Stob, *Die Hanse.* (Verlag Syria, 1995)

著者はハンザ史の専門家とさうより中世史全般の研究で名高い。本書は今のところ Dollinger のドイツ版に相当するが、Dollinger にはない見地も含まれている点がある。

その後多くの各部門専門家による合作である

Jürgen Bracker, Volker Henn, Rainer Postel, *Die Hanse. Lebenswirklichkeit und Mythos.* (Schmidt Römhild, 1998)

が出版された。通史ではなくむしろテーマ毎の各論集であり、特定のテーマに就いて知見を深めようとする向きにはまことに好便である。本書の「ハンザ諸都市の群像」の章は本書に依拠する所が多い。

リュールベク市史に関しては次の大著が得られた。これに匹敵する著書はドイツでも見当たらない。

Heranagegeben, Anjekathrin Grafmann, *Lübeckische Geschichte.* (Schmidt Römhild, 1988)

また、

Die Deutsche Hanse als Mittler zwischen Ost und West. (Westdeutscher Verlag Köln und Opladen, 1963) 等

Ahasver von Brandt, Paul Johansen, Hans van Werveke, Kjell Kumlien, Hermann Kellenbenz

右記五人の大家による「各部門」、各時代別の専門論文の集大成である。ロシア貿易についての漸新な見方などは Johansen の論文から得られる。専門性が高く、しかも高度な内容なのでハンザ史研究者にとっては必読の書というべきである。

ハンザ史の個別問題に関する単行の文献もきわめて多いが、一切省略する。ハンザ史学会の意欲的活動のおかげで、印刷行されたハンザ史料も多く、中世史のなかでハンザは印刷史料集に恵まれているほうであろう。ここでは基本

的なもの四種を挙げるたゞである。

Hansisches Urkundenbuch. 11 Bde. (K. Hohlbaum, K. Kunze, W. Stein, H.-G. v. Rundstedt 編 1876-1939)

は、ハンザ史料として最も幅が広く基本的なものである。ただし、編集上の困難から第七巻はついに出版されなかった。だから第七巻欠如で刊行史料集としては全部である。また、ハンザ史学会創立以来今日まで編集が続けられている Hanseresse 4 Abt. (1870-)

はハンザ総会関連史料を中心とする膨大な史料集で、前記史料集とともにハンザ史料集の双璧を成すが、四部から成り、分量はこちらの方がずっと多い。編集の息も長く、戦後も続けられている。一九七〇年に第四部第一巻が出、一五三七年の分まで刊行されたが、今後継続出版の見通しは立っていない。

リューンベクの史料集としては

Urkundenbuch der Stadt Lübeck. Codex Diplomaticus Lubecensis, Lübeckisches Urkundenbuch. 1. Abteilung. 11 Bde. (Lübeck, 1843-1932)

が基本的である。ただし最初の部分には刊行年のせいもあって、史料研究の成果が進んだ今日再検討を要するところもある。

イングランド貿易の史料集としては

Karl Kunze, Hansacken aus England 1275-1412 (Hansische Geschichtsquellen 6. 1891)

が若干の統計をも含み利用価値が高い。

近年では次のハンザ史料集が刊行された。

Rolf Sprandel, Quellen zur Hanse-Geschichte. Ausgewählte Quellen zur deutschen Geschichte des Mittelalters. Freiherr vom Stein-Gedächtnisausgabe. Band XXXVI. Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1982.

有名な総合史料集中の一冊にまとめられているのでハンザ研究入門には簡便ではあるが、専門的に深く研究を進めるには不十分である。そのうえ編者 Sprandel がハンザは中世末の歴史現象だという見解の持ち主なのでその点での

偏向もあろう。またラテン語原文には現代ドイツ語訳が付されているが、中世低地ドイツ語原文にはそれが無い。日本の研究者にとっては後者にこそ対訳がほしいところである。それにつけて思い出されることがある。かつてハンザ研究者 Walter Stark に史料を読むに際してラテン語と中世低地ドイツ語とどちらが楽かと問うたところ、しばらく考えた末に中世低地ドイツ語のほうがだろうと答えてくれた。なにしろ子供のころから聞き慣れているからとのことであった。われわれ日本人としてはラテン語のほうが何とか意味が通れるが、中世ドイツ語となるとお手上げである。筆者など専門論文の場合にはラテン語で勝負のつく時代とテーマに逃げている始末である。やはり現地の研究者には圧倒的な強みがある。しかし今後のハンザ研究者は中世低地ドイツ語に相当熟達していないと務まらないであろう。